

仙台 発・紙リサイクル共創モデル実験

南東北 広域連携を目指して

～地域循環共生社会づくり～



要・仙台市ロゴ使用許可申請

2025年 月 日



目次

- ① 啓発活動のストーリーイメージ
- ② 啓発活動の多様な協働体制イメージ
- ③ 仙台市の強みを生かした循環モデル
- ④ 当面の啓発活動イメージ「雑がみさまを探せ！」を軸に
- ⑤ 杜の都環境プラン 仙台市環境基本計画との親和性
- ⑥ 第四期 宮城県環境基本計画との親和性
- ⑦ 期待される成果イメージ
- ⑧ 本提案への思い
- ⑨ 将来的な啓発活動の広域展開への期待

(参考)

- ・ 雑がみさまを探せ！（雑がみ回収促進社会実験）
- ・ 紙リサイクルの重要性
- ・ 紙リサイクルとSDGs
- ・ Towards 2030 & Beyond ・ 古紙センターPDCA

1. 啓発活動のストーリーイメージ

各自治体では、ゴミ焼却施設の更新・統合や最終処分場キャパの課題が顕在化しつつあり、**資源循環型モデルの更なる推進**が急務。

本提案は、仙台市を始め、**各自治体が有するポテンシャルを最大限**に活かし、**「人・資源・地域経済」が循環**するローカル・エコシステムの推進を目指すもの。

紙リサイクル（特に雑がみ）を中核とした地域共創モデルを推進し、**「環境」「教育」「地域経済」**の3分野を横断的に結び付けることで**「見えるリサイクルの輪」**を目指す。

導入に際しては、**既に仙台市が有する**地域資源、制度、ネットワークを**最大限活用**しながら持続可能な紙リサイクルモデルを**「啓発活動」を通じて「可視化」**する。

(起) 紙ごみや雑がみをめぐる課題の再認識

(承) 仙台市、県各自治体がこれまで積み上げてきた積極的施策と地域資源の可視化

(転) それらを有機的に統合し、**地域全体の参加型**で展開する循環モデルづくり

(結) その成果が県民生活の質を高め、**仙台・宮城ブランドと環境施策の発信力**を高める

1. 啓発活動のストーリーイメージ

資源循環を共創の中核主体として、雑がみ回収・利用を地域コミュニティに根付かせる。

多様な生活者・事業者・行政を結び、その成果と意義を可視化・共有することで、持続可能な地域共生圏の形成を目指す。

3つの軸を有機的に構造化する。

(1) 「見える化」×「つながる化」

自治体や企業、団体との共創事例を公開し、「つながり」の存在を社会に共有。

(2) 参加共感型コミュニケーション

情報の一方通行脱却「わかる・できる・続ける」体験を設計。

(3) 地域コミュニティ内経済・価値の共創

地域の循環共生圏、地域経済や自治体の課題解決と一体化するメッセージを意識。



啓発活動の多様な協働体制イメージ（仙台市の検討事例）

行政

各市町村（資源リサイクル関連、福祉、教育委員会等）：施策調整、拠点整備、学校授業導入、公益施設運営

教育機関

小中高、大学（東北、宮教、工業、福祉、仙台、学院大等多数）EMS活動、新入生環境授業、ボランティア、PBL型地域参加

福祉・高齢者団体

就労支援B型事業所、社会福祉協議会、老人クラブ等：拠点運営補助、見守り交流

企業・商工会

スーパー、包装印刷、食品、信金、運輸等：店頭広報、ポイント制度連携、雑がみ袋広告、事業系雑がみ回収、SCCI連携

市民団体

PTA、NPO、環境ボランティア：地域拠点協力、イベント運営、住民啓発

メディア・研究機関

地元新聞社、TV、SNS、大学研究室等：広報支援、効果測定、全国展開モデル評価

静脈・製紙産業

市内～広域エリア内の製紙工場、古紙問屋、回収収集業者：雑がみ受入、回収・品質管理、搬送

スポーツ団体（少年・プロ）

少年野球団・サッカー団等：集団回収、資源回収協力、啓発活動、保護者との家庭連携、エリア内のプロ球技チーム連携

需給両業界団体

古紙再生促進センター東北地区委員会、東北製紙原料直納協同組合：活動全般支援

3. 仙台市の強みを生かした循環モデル

環境先進都市の政策基盤

仙台市は「杜の都環境プラン」に基づき脱炭素・資源循環に力を入れており、雑がみ回収はその具体施策として位置づけやすい。

大学・教育機関の連携

東北大学をはじめとした多様な大学群が集積し、環境サークルや地域連携が盛んであり、学生参画型のリサイクル啓発と親和性が高い。

市民協働の素地と行動力

地域団体や町内会による地域活動が活発で、市民参加型の分別・集積所運営など、地域実装に適した土壌が整っている。

広域拠点都市の発信力

仙台市は東北全体の中核都市として高い情報発信力を持ち、雑がみ分別モデルの先進事例として他自治体への波及が期待できる。



都市機能と自然をあわせ持つ「杜の都」
学都仙台の「知の力」は大きな強み

仙台市は、県人口の約50%近くを占める、東北最大の都市として多様な地域資源と高い市民協働力を持つことが強みである。特に環境施策においては「杜の都環境プラン」のもと、脱炭素・資源循環・人づくりを軸とした包括的な政策展開を進めており、大学・地域団体・市民の連携も活発である。本モデルが掲げる「雑がみ掘り起こし」は、こうした地域の協働基盤と整合し、市民参加による分別・回収行動を通じて、環境意識の向上と資源循環の実効性向上に寄与するものであり、仙台のまちづくり方針と親和性を持つ。

“東北エリア広域に於ける紙資源の地産地消”を再確認することで、輸送コストや環境負荷軽減の強みや、地域内経済の循環性の情報発信を充実化し、地方都市に於ける全国のベンチマーク化を志す。

新規設備や格段の追加投資を前提とするのではなく、すでに地元地域が有する地域資源、制度、ネットワークを最大限活用しながら、段階的かつ持続可能に展開する「**啓発モデル**」を可視化。

4. 当面の啓発活動イメージ「雑がみ様を探せ！」を軸に（2025～26年度）

雑がみ啓発と学校教育との接続

市内小中学校において紙リサイクルに関する啓発活動「雑がみさまを探せ！」を通じた出前授業やワークショップを実施。
「子供から家庭を変える、社会を変える」児童生徒や保護者の家庭内分別を促進。

広域エリア内の製紙工場群との連携

仙台市を核とする東北域内には紙リサイクルの地域内処理・利用が可能な製紙工場の存在があり、それらとの連携を通じた、紙資源リサイクルの東北地産地消を更に推進。

スポーツ団体との連携

スポーツ少年団の資源回収活動協力、運動と公共活動の融合を図る。集団回収活動の活性化、世代間交流の機会にも繋げる。また県内のNPB、J・B・WE等、各プロチームとの連携を通じ、試合時の「雑がみさまを探せ！」啓発キャンペーンを図る。

市イベント・施設に於ける啓発活動

多くの市民が参加する市民イベント、祭り、環境フェアやリサイクルプラザ、公民館などを通じた「雑がみさまを探せ！」啓発を通じ、一人ひとりの参画意識醸成を図る。

大学生ボランティアとの連携

大学環境活動団体などを通じた、学生を募集、「雑がみさまを探せ！」運動の支援を通じた持続的な啓発活動の組織力強化、学生自身への社会課題解決体験のきっかけとする。

地元企業との連携による資源循環

大規模商業施設、商店街店舗を通じた、地域ポイント利用・認証制度（「仙台リサイクル応援店」等）による消費者との接点強化を推進。企業の紙袋への「雑がみ回収に利用」を訴求する表示協力。

5. 杜の都環境プラン 仙台市環境基本計画（2021～2030）との親和性

資源循環都市づくりとの整合性 行動する人づくりと意識醸成

市の「杜の都環境プラン」は「資源循環都市づくり」を主要施策に、3Rの推進を市民・事業者と一体で進める方針を明記。本モデルは、家庭や地域に眠る紙資源を見える化・再資源化し、この資源循環理念を具体化する取組。市民協働と分別意識の向上を前提とした仕組みは、市プラン基本方針と親和性を持ち、紙ごみ削減のモデル事業として実装可能な内容である。

市プランでは、「行動する人づくり」を共通施策として設定、子どもから高齢者まで、世代を超えた環境教育・実践機会の提供を重視。本モデルは、学校や町内会、大学、企業などが実地で関わる行動促進型であり、市民の分別習慣や環境意識の向上に寄与する。学生・子どもとの協働による啓発活動やイベント実施は、教育・普及啓発方針と合致し、人的資源の循環にも資する。

協働体制と地域共生構想

市プランでは、野横断的な協働体制の構築を重点に、地域・教育機関・企業・行政の連携による環境施策の展開が求められている。本モデルは、市民、古紙業界、学生団体、自治体が役割分担しながら一体的に進める地域協働型モデルで、マルチステークホルダー型の枠組みとして、地域の活性化や持続的関係性構築にも波及し、共創の拠点づくりに貢献できる可能性がある。

脱炭素都市づくりとの連携

市プランでは、2030年度までに温室効果ガスを55%削減するという仙台市独自の高い目標を掲げ、「脱炭素都市づくり」が最上位の政策柱。本モデルを推進することは、焼却処理量の削減、CO₂排出の抑制に寄与する。市内各地の紙資源回収活動を底上げし、家庭・地域単位での排出抑制が実現可能となり、都市型脱炭素戦略の一翼を担う施策となり得る。



参考：杜の都環境プランより

6. 第四期 宮城県環境基本計画（2021～2030）との親和性

循環型社会の形成との一体性

宮城県環境基本計画では「循環型社会の形成」を政策項目に位置づけ、県民・事業者・行政が協働して3R推進することを明記。本モデルは、家庭内や地域の資源を分別回収し、再生利用へつなげるプロセスを含む。その実務構造と目的は、県の循環型社会構築施策と整合しており、地域循環共生圏の実現にも資する。

地域循環共生圏との整合

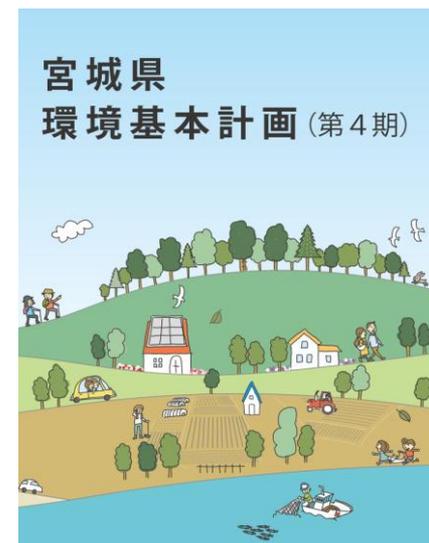
県計画では「地域循環共生圏」の概念を基本理念として掲げ、地域資源の地産地消や近隣間ネットワークによる補完関係を重視。本モデルは、町内会・自治体・古紙業界・大学・市民団体などが協働して資源を地元で循環させる仕組みであり、地域資源の補完と活用を通じた自立分散型の社会モデルに符合する内容である。

脱炭素社会構築との親和性

県計画では「脱炭素社会の構築」を重要政策と位置付け、2050年に実質ゼロを目指す目標を明確にしている。本モデルにより焼却量を削減すれば、CO₂排出の抑制の一助となり得る。焼却ごみに含まれる紙資源を回収・資源化することで、廃棄由来の排出を削減し、県の脱炭素目標達成に資する取組となる。

環境教育・普及啓発との一致

県計画では教育・普及啓発や全主体の環境行動促進を共通取組として掲げ、県民ひとりひとりが「自分ごと」として取り組む地域社会を目指している。本モデルは、小中学校・大学・自治会等を通じて実際の分別活動を体験させる教育プログラムや地域啓発を伴うため、環境意識の醸成と行動変容を促し、「行動する地域社会」構築方針にも沿う内容である。



宮城県
令和3年3月

参考：第四期環境基本計画より

7. 期待される成果イメージ（順不同）

- ・ 雑がみ回収量の増加、可燃ごみに占める紙ごみ比率減少
- ・ 紙ごみによるCO2排出削減効果の定量化
- ・ 域内製紙工場とのマッチングによる資源地産地消モデルの加速
- ・ 小中高校生・大学生・高齢者・地域住民のリサイクル意識向上と世代間交流の促進
- ・ 高齢者との交流機会創出による地域コミュニティの活性化、孤立防止
- ・ 障害者の地域参画による共生社会モデルの実証と福祉的就労の場の創出
- ・ 紙リサイクル業界における次世代担い手の掘り起こしと職業理解の深化
- ・ 増加する外国人居住者とのコミュニケーション活性化
- ・ 行政・住民・業界がともに成果を実感できる、参加型の循環型地域社会モデルの形成
- ・ 近隣自治体、南東北各県、更に全国への波及効果 等々

↓ 5%

燃えるごみ量削減

「雑がみさまを探せ！」
を通じた分別底上げ

↓ 5%

ごみ排出量削減

1人1日当たりの
ごみ排出量削減

↓ 15%

紙ごみ比率減少

家庭系の燃えるごみに
占める紙ごみの比率減少

5000+

啓発参加者数

多世代の市民参加による
コミュニティ活性化

8. 本提案への思い

これら一連の対策は、仙台市を始めとした「先進的な施策を展開」してきた**各自治体**において、**すでに個別には推進されてきた**要素である。

今回の**啓発モデルづくり**では、それらを有機的に結合し、回収・啓発・再資源化・教育・経済の各分野が一体的に連動する**“リサイクルの輪”**として、**県民に視覚的・体感的に可視化される仕組み**を目指したい。

これにより、県民一人ひとりが**地域循環への参画を一層、理解・実感**でき、**長年積み重ねてきた資源循環の取り組みが、より広く認知**され、成果として花開くことが望まれる。

SDGs未来都市、ゼロカーボンシティ宣言都市を、数多く有する宮城県において、紙ごみを中心とした可燃ごみ削減の実践は、温室効果ガス削減や持続可能なまちづくりの成果指標とも直結するものであり、**地方自治体の環境政策の模範事例**として、他自治体に発信されることを期待する。

9. 将来的な啓発活動の広域展開への期待

仙台市での「**雑がみさまを探せ!**」を通じた啓発モデルは、段階的に隣接自治体、更には県、南東北広域連携に展開可能なスケラブル（拡張可能性）構造を有する。まず2025～26年度に仙台市で啓発活動を始め、諸課題の整理を実施し、成果を蓄積。

2026～2027年度には、リサイクルインフラの観点で本モデルとの親和性がある、近郊都市エリア、仙台広域都市圏でもある、富谷、多賀城、名取、塩釜等の自治体と連携拡大し、広報、リサイクル啓発の共通化を進める。

2027～2028年度以降には更に、進捗と県の地域循環共生圏との整合性を再確認の上、モデル自治体を展開し、製紙産業、静脈産業と自治体のクロス連携を加速。段階的・実証型のモデル普及を通じ、広く県民の紙リサイクル参画への理解向上に繋がることが望まれる。

以後、更に南東北エリア全体への拡大を目指し、2030年頃には広域環境政策への反映を目指し、杜の都から広がる「南東北・雑がみ資源循環ネットワーク」を念頭に置いた、より広域に於ける資源リサイクルの全体最適化活動なども視野に入りたい。

(参考) 雑がみさまを探せ! (雑がみ回収促進社会実験)

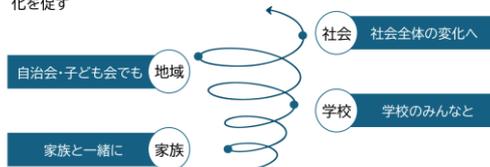
目的

雑がみの認知度向上並びに分別・回収の習慣づけを目的とした啓発活動
⇒幼少期(学童期)からの分別習慣の効果は大きく、未来にわたって環境配慮行動を行う人材育成につながる



目的

子どもを発信源として家族と一緒に取り組むことで、同居する親世代の意識変化を促す



「子どもを変えていくことで親を変え、社会を変えていく」

効果(自治体・業界)

可燃ごみに捨てられる雑がみ回収促進を進めることで、可燃ごみの削減や新たな製紙原料の確保につながる



「雑がみさまを探せ!」は、いかにして子供たちに家庭での雑がみ分別に誘導するかを、大阪大学大学院経済学研究科・松村真宏教授(仕掛け)と当センターが連携する新たな試み。

仕掛けのアプローチとは、正論(従来の正攻法)で解決しなかった社会課題を正論は使わずに参加者(小学生)が興味を持ちそうな「仕掛け」を利用することで、結果的に望ましい行動を実現し、その後も親世代を絡めて、家族で継続しやすい仕掛けを狙う。

子供達への「仕掛け」コンセプト
紙=カミ(神) ⇒ 家庭の中には、神(紙)様・「雑がみさま」が宿っている。



表面

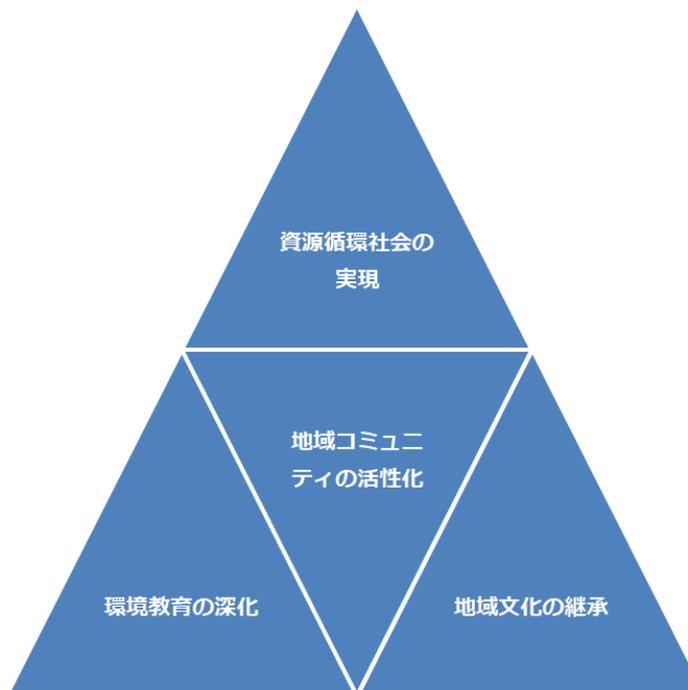


裏面



一般向け

(参考) 紙リサイクルの重要性



紙リサイクル、とりわけ家庭や地域から排出される「雑がみ」は、その性質上、行政・業者・市民の協働によってのみ更なる分別と回収が可能となる分野。

また、資源循環・地域交流・環境教育・福祉・社会包摂といった複数の公共的価値を同時に実現できる特性を持ち、地域循環共生社会の実装モデルとして即効性が期待される領域。

(参考) 紙リサイクルと SDGs

SDGs ・ 紙のリサイクルが果たすべき役割

(2022年制定)



4 質の高い教育をみんなに

■紙のリサイクルの役割

⇒紙の再生品の利用、リサイクルを学べる教育の機会を提供する



11 住み続けられるまちづくりを

■紙のリサイクルの役割

⇒使用済の紙を分別して再利用を図り、資源の有効活用を図る



12 つくる責任 つかう責任

■紙のリサイクルの役割

⇒製紙業界のリサイクル可能な商品開発の推進に貢献する
⇒消費者の持続可能な社会形成への参画意識を醸成する



13 気候変動に具体的な対策を

■紙のリサイクルの役割

⇒ごみの資源化による脱炭素社会の実現に貢献する



15 陸の豊かさも守ろう

■紙のリサイクルの役割

⇒森林資源の持続可能な利用に貢献する



17 パートナーシップで目標を達成しよう

■紙のリサイクルの役割

⇒多様なステークホルダーが連携し、持続可能な社会を実現する

日本の紙リサイクルは国民の分別意識の高さや善意に支えられ、また長年にわたる関係者の努力の結果、資源の有効利用や廃棄物の減量化といった循環型社会の形成にも大切な役割を果たしてきた。

当センターは、消費者や事業者を始めとした紙リサイクルに関わる多様なステークホルダーの皆様とともに、広報啓発、調査研究等の事業を通じた古紙の回収や利用の促進に向けた約半世紀弱の歴史を積み重ねている。

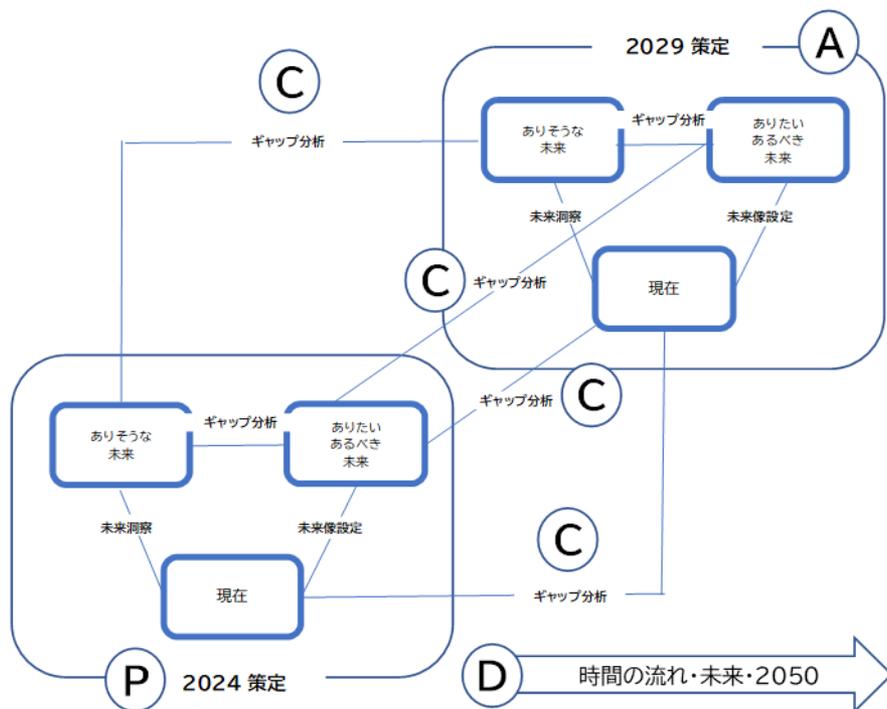
時代背景や社会が変化してきた現在も変わらず、むしろ様々な社会課題が深刻化し、国際社会がSDGs（持続可能な開発目標）の達成など持続可能な社会の実現を目指す中、原点に立ち返ったセンター活動がより一層重要になると考える。

当センターは創立半世紀の節目に向け、活動を支えていただいている皆様とともに、まずは紙リサイクルとSDGsとの関連性を再確認することを2022年にスタートした。今後も多様な立場の方々との共通言語ともいえるSDGsを通じて、小さな連携の積み重ねを大きな力に繋げ、紙リサイクルの更なる発展を目指す。



(古紙センターSDGsレポート)

(参考) Towards 2030 & Beyond・古紙再生促進センターPDCA



当センターは創立半世紀を迎えたが、その節目に当たり多くの関係者の方々から寄せられた「20」の中長期課題（サステナブルチャレンジ2050・共創共生）をお示しした。本年度から、一連の課題対応に向けての具体的な対策や、新たな試みを開始するに当たり、ロードマップイメージである「Towards 2030 & Beyond」を策定した。

様々な社会課題解決に向けた布石は2030年までがラストチャンスであり、その影響が未来の可能性を左右すると言われる時代にある中で、環境・経済・社会側面の統合的向上や、リサイクルに関わるマルチステークホルダーとのパートナーシップを念頭に置いた事業を通じて、循環型社会形成に関する連携・協働のつなぎ手としての、更なる努力が当センターにも求められている。

今後の課題対応については需給両業界の協働に加えて、これまで以上に広く、紙リサイクルに関わるステークホルダーが、改善できる技術や意識改革を総動員した、統合的なシナジーや全体最適を議論すべき時期にある。



「サステナブルチャレンジ 2050・共創共生」



「Towards 2030 & Beyond」



「創立 50 周年記念誌」

啓発協働の可能性についての「一例」（順不同）

本モデルの定着化に向けた**啓発実験事業** 「雑がみさまを探せ！」を軸に（2025年～2026年）

- ・市内大学生の啓発ボランティア確保（15大学・3万7千人）
東北大学、宮城教育大学、宮城大学、東北学院大学、東北福祉大学、宮城学院女子大等の啓発ボランティア確保。「雑がみさまを探せ！」支援を通じた、継続・持続的な啓発組織力強化、学生自身の社会課題解決体験のきっかけとする試み。
- ・東北大学、東北工業大学EMS（ISO14001）連携
環境教育ISO学生委員会、新入生への啓発授業機会、学園祭でのブース出展、継続的な啓発掲示
- ・学生団体との啓発連携
東北工業大学「たんぽぽ」、東北福祉大「EVOL」、尚絅学院大学「FROGS、」大学横断連携「RNECS」、仙台大学「みやぎマモルンジャー」、東北大学ボランティア活動支援室「SCRUM」
- ・各大学留学生とのコミュニケーション、フィールドグループリサーチ（外国人居住者啓発策）
- ・仙台市と地域連携等の協定締結大学との組織的連携検討、「ワケルキャンパス」との提携
- ・仙台商工会議所青年部、女性会との連携、関連企業先での継続的な「ローテーション」回収運動
- ・ベガルタ仙台(J2)、仙台89ERS(B1)、マイナビ仙台レディース(WE)、リガーレ仙台(V)等、地域貢献連携、試合会場での「雑がみさまを探せ！」啓発キャンペーン
- ・仙台市区役所、支所、施設、公民館、環境情報センター、たまきさんサロン等を通じた「雑がみさまを探せ！」啓発、市民（主婦）意識ヒアリング、市民ネットアンケート
- ・仙台エリアのエコフェスタ等のSDGs・環境フォーラム連携、公開授業提供、WS、その他市内イベントでの「雑がみさまを探せ！」啓発キャンペーン ……………

キャラクター コラボレーションイメージ

要・仙台市ロゴ使用許可申請



仙台市・ごみ減量・リサイクル推進啓発キャラクター
ワケルくんファミリー



仙台市・ごみ減量・リサイクル推進啓発キャラクター
メビウスちゃん



仙台市オリジナルの雑がみ回収ロゴマーク